日本の経済

木村禧八郎 著

私の大学

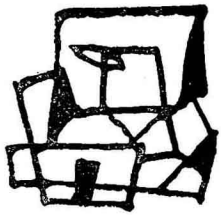
社会科学 1　　理論社

私の大学

上原専祿★長田新★松浦一★高野実　監修

木村禧八郎著

日本の経済



社会科学講座・日本の今日と明日

1

理論社

著者略歴　木村喜八郎（きむらきはちろう）

1901年　東京に生れる
1924年　慶応大学経済学部を卒業
時事新報記者，経済誌エコノミスト同人をへて，北海道新聞論説委員長，同参与をつとめる
1947年　参議院選挙に社会党から出て当選，政調会副会長となる
1948年　政府予算案に反対して社会党をはなれ，黒田寿男氏らと労農党をつくり，中央執行委員，政策調査部長となる
1950年　参議院選挙に再選，
国会では予算委員，大蔵委員として活動
1953年　通商視察議員団に加わって中国を訪ね，日中貿易協定を結ぶ
現　在　日中貿易促進議員連盟常任理事，地方自治研究所理事長，労働経済研究会会長などをかね，木村経済研究所を主宰
著　書　「インフレーションの研究」，「金融経済論」，「基地経済」，「庶民の経済学」，「暮しの知識」その他多数
現住所　東京都品川区大井倉田町 3266.

日本の経済
私の大学・社会科学講座 1
¥ 150
© 1956年6月　第一刷
発行所　株式会社　理論社
東京都千代田区神田神保町一の 64
振替東京 95736・電話東京 (29) 5668-9

はしがき

——しあわせを求めて——

ある雑誌の編集をしている人から、さいきん、おどろくべき事実をきかされました。それは、その雑誌の読者カードのうちから百人にあてて「いまあなたのいちばん悩んでいる問題はなんですか、ちかごろ自殺が多くなっていますが自殺についてどう考えられますか」という質問をだしたところ、その大部分の人の回答が「いちばんの悩みは生活不安であり、こんごどうやって生きて行ったらよいかわからないことです」ということであった、ということなのです。それだけであったならば、まだおどろかなかったのですが、回答者の年令は十八才から二十才ぐらいまでの、いわゆるティーン・エイジャー（十才代）であり、そういう若い人の回答百通のうちの約半分は「自殺未遂の経験をもっている」ということであったという事実をきかされたので、わたくしは、がく然として、しばらく腕組みをしたまま言葉が出なくなってしまったのです。

政府は日本の経済は安定し、正常化し、よくなったと国会で報告しています。新聞や雑誌やラジオは輸出景気だ、豊作景気だ、数量景気だ、インフレなき拡大だと書いたり、放送したりしています。

けれども好景気だ、経済は安定したといわれながら、生活不安から自殺への途をえらぼうとす

る若い人たちが激増しているという事実は、なんと大きな皮肉、矛盾ではないでしょうか。実は皮肉だとか矛盾だとかいってすましてはおけない問題です。この問題は、日本の経済は表面的には景気がよさそうにみえてもその内部は破綻していることを物語っているのです。

国民の暮しが不安になり、生きることにたいして明るさがなくなって、どうして、日本の経済が安定し、正常化したといえるのでしょうか。政府が国会の演説で述べたり、新聞、雑誌、ラジオが書いたり放送したりしている経済の安定とか正常化とかいうものは、なにをもって安定し正常化したというのでしょうか。だれの経済が、だれの生活が、安定し正常化したというのでしょうか。

さいきん新しい中国を視察して帰ってきた、もと職業軍人だったひとが、こういう感想を話したといわれます。

「自分は新しい中国へ行って女も男も木綿の質素な青い服を着て働いている姿をみました。身なりはそまつでしたが、みんないそいそと元気で働いていました。働く人たちの眼をみたところ輝いていました。前途にたいする光明と希望にみちているようでした。視察をおわって祖国日本へふたたび帰ってきましたが、再び祖国の土をふんですぐ眼についたことは、日本人は中国の人たちよりよい着物をきているということでした。しかし働く日本人の眼をみたとき、その眼には前途にたいする光明がなく希望がなく、輝きがありませんでした。不安にみちた眼をし、暗く、くもっていることを直感させられました。中国の人たちは身なりはまずしいが、希望にみちて働いている。日本の人たちは身なりは中国の人たちよりきれいだが、生活に希望と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

明るさがないのです。」

「生活に希望と明るさがない」――このことこそが、いま日本の労働者、農家の人、漁民、インテリ、サラリーマン、中小工場の主人、中小商人、家庭の主婦、老人、子どもなど、ほとんど大部分の日本国民に共通するいちばん深刻な悩みではないでしょうか。

アメリカのMSA援助によって、アメリカに洋行し、軍事訓練をうけて帰ってきた、日本の自衛隊の人がこういう話をしてくれたといって、その話を聞いたわたくしの友人がその内容を語ってくれました。

その話によると「自分（自衛隊の人）はアメリカに行って、蔣介石の軍隊、李承晩の軍隊、フィリッピンの軍隊その他を含めてアジアの十二カ国の軍隊にぞくする人たちと、いっしょにアメリカ軍の訓練をうけました。服装も同じ兵器も同じ、ただ帽子と靴だけがちがうだけです。そうして同じアメリカ軍の同じ訓練をうけたのです。あまりに同じなので、自分はあやふく日本人であることを忘れかかりました。訓練が終ってから、自分たちの教官であったアメリカの将校と話しをしました。その将校は戦後日本にしばらく駐留していたとのことで、日本の事情をよく知っておりました。自分はそのアメリカ将校に日本についての感想をうかがいました。その将校は『日本という国はアメリカ人にとってはたいへん住みよい国でした』と答え、日本駐留中の生活にひじょうに満足していたようでした。自分はそれからまもなく船で祖国日本へ帰りました。日本へ帰ってきてから、アメリカで、あのアメリカ将校からきかされた『日本という国はアメリカ人にとっては、たいへん、住みよい国でした』という言葉が妙に想い出されました。そして、な

るほど『日本という国はますますアメリカ人にとっては住みよい国』になっていることを発見しました。しかしその反面、自分の祖国である日本という国は、アメリカ人にとってはますます住みよい国になっているが、日本国民にとっては、ますます住みにくい国になっていることに気がつきました。」――ということなのでした。

わたくしたちの愛する美しい祖国日本がアメリカ人には住みよく、わたくしたち日本人にとって住みにくく、暮しにくくなり、自殺をして日本人として生き抜くことから、グッド・バイする人たちがふえるということは、どうしたことなのでしょうか。

なにかがまちがっているのではないでしょうか。その原因はどこにあるのでしょうか。

その原因をつきとめて、祖国日本を日本人にとっても住みよい国にしなければなりません。

前途に光明と希望をもって、若い世代の人たちが自殺する代りにもっともっと長く生きたいと願うような祖国にしなければなりません。

そのためには、どうして、多くの国民にとってこうも希望のない、光明のない祖国になったのであろうかという理由、原因、ほんとうの事実を、まずみんながよく知る必要があります。

「大衆がすべてを知り、あらゆることについて判断でき、すべてに自覚してとっくむとき、その国家は強力である」といわれます。

まだまだ、日本国民の多くの人たちは、自分たちが不幸であるのに、その不幸の原因がどこにあるかということについて、ほんとうのことを知らされておりませんし、知ってもおりません。そのために生き抜く勇気がなくなって自殺という敗北的な途をえらぶことになるのです。

たとえば、さいきん、わたくしは、北海道のある繊維工場の若い女の工員さんたちと懇談する機会をえました。そのさい、わたくしが税金の話をいたしましたところ、工員さんたちはみんな口を揃えて、「わたくしたちは、お給金が少いので税金を納めてないのです。ですから税金のお話しをきいてもぴんと身にこたえません」といいました。そこで、わたくしは、「それはとんでもないまちがいです、なるほどみなさん方は所得税という直接税は納めていないかも知れませんが、砂糖消費税とか物品税とか通行税とかの間接税は納めているのですし、また会社に法人税という税金がかかれば、会社はその税金を納めるために、みなさんにお給金として払うべきものを減らして、税金のシワをみなさんによせるのです。またみなさんは、かりに直接税を納めなくても、みなさんのお父さんは直接税を納めているでしょう。そうしてみなさんの家庭の生活全体を、くらしにくくしているのです」と説明しました。そういうお話しをしましたところ、こんどは、みんなの顔が緊張してきまして、次から次へとふだんの生活の疑問について、活潑な質問がでてまいりました。

そして懇談会が終ったときには、みんなの顔は明るく、生きることについての勇気をもち出したようにみえました。

真実を知るということは、人間に、生きることについて、一つの自信と勇気とをあたえるものです。そのために、すこしでもお役に立つようにと念願しつつ、わたくしはこの本を書いたのです。

本書を出版するにあたっては、木村経済研究所員としての同僚中原省一君と理論社の山崎春成

君とに多大の御協力をえました。附記して深く感謝の意を表する次第です。

昭和三十一年五月十一日

著　者

目　次

はしがき――しあわせを求めて……1
第一章　日本の経済は復興したか……13
(1)　経済の復興と国民のくらし……13
生産はふえたが――経済の復興と国民のしあわせ
(2)　景気はよくなったというけれども……16
数量景気――失業者はふえている――貧富の差はひどくなっている――中小企業のくるしみ――安定したのは誰か
(3)　安定したのはだれか……23
借金のへった大企業と銀行――資本は安定したが経済は安定していない
(4)　国民のくらしは安定していない……27
消費水準と生活水準――統計は実情を正しくあらわしていない
(5)　なぜ失業者がふえるのか……29

二つの原因——生産年令人口の増加——就職難の悲劇——オートメーションと失業——オートメーションと中小企業

(6) 「数量景気」のかげに……39

行きどころのない悲劇——輸出増加のかげに

第二章　日本の経済とアメリカ……43

(1) 日本の資本の力は強まってきた……43

力を強めた大資本——強まってきた「自立」性——資本の安定は本ものか

(2) かたわの貿易……46

輸出はなぜ伸びたか——アメリカに頼る重要物資——赤字の対米貿易——国際収支が黒字になるわけ——特需・日本の対米従属の経済的基礎

(3) 日本経済の命脈を制するもの……57

外国から借金して買入れる外国機械——大企業は軒並みにアメリカの技術を入れている——祖国のなかの異国——株式投資の場合

(4) 日本経済と東南アジア……63

深刻化する市場問題——輸入転換と東南アジア開発の夢——そう思い通りにはいかない——アメリカに頼ろうとする日本と自力で行こうとする東南アジア

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第三章　人口と雇傭の問題を解決する三つの方法……75
(1) 就職難と失業者の悲劇は宿命的か……75
貧しい国土と多すぎる人口——死んでしまえという政治と道を切り開こうとする政治
(2) 食糧自給度の向上——食糧増産……77
五億ドルの輸入食糧——自給度向上政策は立てられたが——食糧は増産できる——消えてゆく食糧増産計画——アメリカの余剰農産物——過剰農産物をおしつけられると——食糧増産はストップ——河野農政の方向——再軍備と食糧増産
(3) 国産愛用……86
合成繊維の増産——外国自動車のはんらん——流れこむ外国機械——重油と石炭
(4) 輸出復興と日中貿易……91
輸出はまだまだ不十分——日中貿易をやるのにアメリカの機嫌をおそれる必要はない
第四章　国民のくらしと予算……96

(1) くらしの苦しさは政治の悪さ……96
「しあわせの歌」のひびくところ——政治と予算——政治を正しくみつめるために
(2) 三十一年度予算の三つの前提……99
三つの前提——鳩山内閣がひろいあげた綜合経済六カ年計画——ウソをついた鳩山内閣
(3) 予算と物価……105
予算と物価との関係——予算規模と物価——不生産的支出と物価——物価をあげる予算
第五章　重税国日本……116
(1) われわれはどれだけの税金をはらっているか……116
一人あたり一五一三八円——減税？——直接税から間接税へ
(2) 税金はなぜ重いか……121
取れるところから取っていない——資本の蓄積と免税措置——優遇される不労所得——不必要なことに金を使いすぎる——生活にくいこむ税金——重税国日本

第六章　国民の税金はどう使われているか……129
(1) お金のかかる再軍備……129
税金はどう使われているか——再軍備費の実態——再軍備の費用を節約すれば
(2) アメリカに支払われる税金……135
防衛分担金の内容——基地拡張の費用もわれわれの税金で——アメリカをまもるための訓練
(3) 誰のための再軍備か……137
防衛と再軍備——再軍備熱あおる旧軍人恩給費——再軍備と賠償——さか立ちした話し
(4) 再軍備のかげの犠牲……143
おもてむきの数字にごまかされてはいけない——社会保障の内容は低下してゆく——いつまでつづく校舎不足——科学も再軍備優先——しわよせは父兄の肩に
(5) 放擲される経済の発展……148
民間資金の活用——銀行がもうかって国民が損をする

第七章　町や村はなぜ赤字で苦しむのか……152
(1)　国家財政と地方財政……152
地方負担なしには何もできぬ——立ちぎえてしまう計画
(2)　政府の赤字対策では住民は楽にならない……155
地方交付税はふえたが——しわよせの行くところ
(3)　赤字はなぜ出てきたか……157
三つの原因——国の責任——再軍備と地方財政の赤字——地方の責任——住民の責任
結び……162

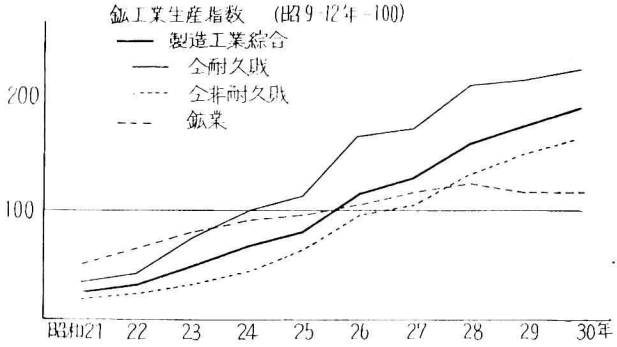
第一章　日本の経済は復興したか

(1)　経済の復興と国民のくらし

生産はふえたが…

「戦争が終った直後の、焼跡ばかりで、食べるものもロクロクなかったころにくらべると、このごろは日本もずいぶん立ち直ってきたなあ、とたしかに思います。また『経済が安定した』とか『正常化した』というようなことも言われているし、生産の伸び方もここ一、二年はずいぶんめざましいものだ、などということも聞きます。日本の工業生産の伸び方は世界でももっとも高い方だということですが、でも、自分たちの毎日のくらしをふりかえってみると、相変らず苦しい、みじめなもので、日本経済が復興したといっても、ちっとも私たちのくらしを向上させることにはなっていないような気もするのです。何だか、そこに経済復興といわれても、フにおちないものがあるのですが、一体、日本の経済は、どんなところまで立ち直って、どんな状態にあるといえるのでしょうか。」――さいきんは、こういう質問をよく受けます。

たしかに表面からみると、日本の経済はずいぶん復興したように感じられます。たとえば生産



第1図　工業生産はぐっと回復してきている

についてみると、戦前、つまり、日本の経済が比較的正常な状態にあった昭和九年―十一年を一〇〇とすると、製造工業の生産指数は、上の図のような足どりですすんで、昭和二十九年平均では一七三・八、昭和三十年十一月では一九九・二になっています。つまり、戦前のざっと倍ぐらい生産がふえているわけです。

一方、人口の方はどのくらいふえたかといいますと、昭和十年の人口が六千八百六十六万人であるのに対し、昭和三十年の人口は八千九百二十六万人と推定されていますから、約二千百万人、すなわち三〇％の増加になっているわけです。

人口は三割しかふえていないのに対して、生産は倍以上にふえている、つまり、人口よりも生産のふえ方の方が大きいのですから、それだけからみると、国民の生活水準は、戦前よりもずっとよくなっている筈です。

たしかに、物の生産はふえ、商品の出まわりは豊富になっています。銀座あたりを歩いてみても、もう無い物はない。戦前あったものばかりでなく、戦前にみられな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.